

「衆志成城」 中国経済新聞 080601 掲載

まずおことわりしておくが、これは新語ではない。初出は春秋時代の『国語』で、「多くの人が一致協力すれば堅固な城塞ができる」意味だが、今度の地震発生後、中国中央テレビのニュースや特別番組の冒頭の字幕に必ず登場し、「抗震救災」とともに中国人民の合言葉になっている。

華南にある日系企業で支店長をしているかつての教え子（日本人）から、こんなメールが届いた。「出張からもどり、地震の翌々日に出社したら、ちょうど赤十字の募金をしていた中国人の社員たちが寄ってきて、今年の社員旅行を中止し、浮いた費用を被災者への救援に充てたいと言うのです。日ごろは指示を受けてから行動する場合の多い社員たちが、自主的に全員一致で申し出たものですから、感激しました。」

いったいに中国人は「血を取られる」ことを神経質ほど嫌がるのだが、今回は各地で献血車に長蛇の列ができていているという。地震は中国の大地を揺るがただけでなく、華僑・華人を含むすべての中国人の心をも揺さぶったようだ。救援に立ち上がった多くの感動的事例がそのまま、心をつにして困難を克服する決意——「衆志成城」を体現している。

振り返ってみると、中国では大きな試練に直面するたび、「衆志成城」が呼びかけられてきた。日本軍国主義の侵略が東北から華北に迫った一九三五年に、『風雲児女』という映画の主題歌（田漢作詞、聶耳作曲）が、「我らが血肉で築こう新たな長城を」と歌い上げた。これが「義勇軍行進曲」と名づけられ、現在の国歌になっている。

五年前の SARS の時にも、「衆志成城」が合言葉になり、幹部、医療関係者、庶民が一体になって「硝煙なき戦争」に立ち向かい、短期間で制圧できた。この戦いは、胡主席らの指導部にとっては発足早々の試練でもあったが、みごと乗り切ることで人民の信頼と国際的評価を高めた。

現指導部が二期目に入った今年は、年初の広域雪害に始まり、チベット、四川省地震と試練が相次いでおり、八月にはオリンピックを控えてもいて、まさに多事多難の年である。

選挙という洗礼を受けない中国の指導部にとって、人民の信頼と支持が具体的に表われる場合は、このような試練の時なのかもしれない。

しかし、不幸中の幸いというべきか、災いを転じて福となす諺のとおり、聖火リレーで傷ついたかに見えた中国のイメージが、地震を機に見直されつつあるようだ。

中国人民の「衆志成城」の行動が世界をも動かしている。数万の犠牲者と数千万の被災者への同情だけではない。それは、中国が人命を何よりも大切にし人権を尊重する国であることを、世界に示してもいる。そして寄せられる国際的支援が、今度は中国人民の世界を見る目に変化を生みつつある。